

2016.8.7 年間第19主日

目を覚ましているしもべ

ルカによる福音書 12:35-40

「腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい。主人が婚宴から帰って来て戸をたたくとき、すぐに開けようと待っている人のようにしていなさい。主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。はっきり言うておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒がいつやって来るかを知っていたら、自分の家に押し入らせはしないだろう。あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」

説教

エルサレムがローマ軍に攻め入れられ壊滅するのは西暦70年のことです。イエスは西暦33年ごろに十字架刑についていますから、それから37年後にエルサレム壊滅=イスラエルが滅びたことを歴史はつたえています。エルサレムにあったキリスト教会もそのとき以後の記録は残っていません。エルサレムが滅ぼされたときに運命を同じくした、つまり滅んだと考えられています。もちろん、すでにキリスト教会はエルサレム以外にも弟子たちの宣教によってできあがっていました。それは使徒行伝に詳しく記されています。エルサレム崩壊後、キリスト教会はユダヤ人の土地から離れて展開、発展をしていきました。

ところで、ルカの福音書はいつ書かれたか、70年から90年の間ではないかといわれています。エルサレム崩壊後にできあがったということです。ということはユダヤ人からみての世界の終わり、首都エルサレム崩壊を知っているルカによって記されたということになります。つまり、ルカ福音を聞いて

いる当時の信者たちはエルサレムがもうこの世にはないことを現実として知っているということになります。

きょうの福音は終末における救いを待ち望むキリスト信者の立場を、主人が帰ってくるのを待つしもべに譬えて書かれています。この譬えはここの箇所以外にもよく使われています。これは聖書をよむときの「お約束」のたとえになっています。

「腰に帯を締め」という表現は服装に注意して乱れないように身支度を整えなさい、ということです。キチンとした身なりで、主人の帰りがどんなに夜が遅くなっても照明、ともし火をつけて待っていなさい、とっています。続けて、主人が帰ってきて戸をたたいたら、すぐに開けましょうとっています。そうすれば主人に褒められて、主人が給仕までしてくれるという、とてつもないほどの幸運に恵まれる、とルカはいいます。逆にいえば、起きていないしもべ、主人の帰りがあまりにも遅いので寝てしまうようなしもべは主人にどう思われても知らないよ、ということかもしれません。

泥棒云々と記されているところは強引な解釈ですが、泥棒と同じように「人の子」はやってくる、つまりキリストの再臨は思いがけない時にくる、ということでしょう。泥棒が家に忍び込むことをキリスト再臨に譬えているので、ちょっと現代の感覚ではわかりづらいのですが、当時の人たちにはピンと来たのかもかもしれません。

イエスの処刑後、エルサレムの隠れ家に集まっていた弟子たちの中に復活のイエスは「シャローム」あなたがたに平和がありますように、と挨拶され、そして主はドアが閉まっているのにいつのまにか去っていかれました。そんなイメージ、どこからともなく忍び寄るイメージが再臨のキリストに重ねられているのかもかもしれません。

迫害され洞穴の中で礼拝をしていたキリスト信者たちが希望をもってキリス

トの再臨を待ち望んでいる、昼間は生活のためにクタクタになるまで働いた人たちが、夜になって、秘密の会堂に集まり賛美をして聖書のことばを聞いている、そんなときにこの福音、ルカ 12 章が朗読されると想像してみましよう。

「みなさんの中には身なりにまで気を配れない方もいるかもしれません。わたしも生活に追われてこの一張羅を着回ししています。主は腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい、といわれました。そのみ言葉を振り返って自分を見つめなおす時、わたしたちは自分の服のことを気にするのでしょうか、自分の帯のほつれを気にするのでしょうか。そうではない、仮に帯にほつれがあり、擦り切れていようとところの中の帯はキッチリ締めています。ともし火をともしていなさい、と命じられるとき、会堂の火皿の油はもうのこり少なくなっているかもしれません。たとえ、ともし火が消えかかっていたとしても、わたしたちの心のともし火は赤々と燃え上がっています。みんなでここをあわせて主の再臨を待ち望みましょう。いまがどんなに苦しくても希望をもって待ち望みましょう」とその日の説教者はこんな励ましを語っていたのではないのでしょうか。

きょうこの福音を聞いたわたしたちも、自分自身を振り返り、帯を締め、ともし火を灯し、主の再臨をあらためて待ち望む者とされるように祈りましよう。
